

冬季の事故

今回は、スカウティング誌昨年5月号に掲載された、2009年（平成21年度）の事故分析の中から冬季の事故を中心に分析しました。よくお読みいただき、ぜひこの冬の活動の参考にしてください。事故が少しでも少なくなることを期待します。

冬季の事故例の分析

5月号に月ごとの発生状況がありましたが、8月の夏季活動の次に多いのが1月から3月にかけての冬の事故で、毎月40件以上の報告があります。その総数124件に対し、スキー、スケート、スノーボード、そり等での事故が74件と6割を超えています。

この74件についてさらに分析すると、部門別ではBVS：9% CS：35% BS：18% と10歳未満から10歳代にかけて多く、7割を占めています。[図1]

また、種目別では、スキー、スノーボード、そり等、雪上が6割、スケート等氷上が4割で、降雪の多い1月から2月に集中しています。[図2]

これを県連盟別に見ると寒い北日本よりも関東から西日本にかけての団で多く発生しており、活動に慣れていない、年に1回の行事だからと無理をして滑ろうとする等の原因が考えられます。[図3]

事故の発生時間を分析すると、活動開始直後の慣れていない時に起きていますが、スケートでは順次減少傾向にあります。しかし、スキー等では、午後から帰る間際の事故が増えています。午前中はスクール等の監視体制の下に滑っていますが、午後の自由滑走になると、無理をする、無謀な行動に出る、疲労が溜まってくる等の原因

図1 部門別（74件）

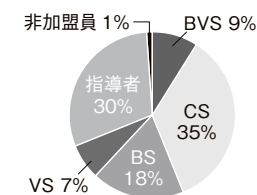


図3 県連盟別（74件）

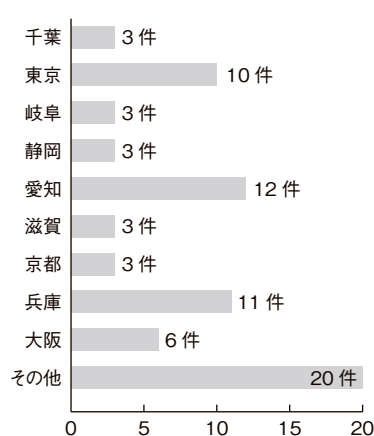
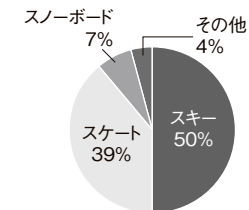


図2 種目別（74件）



で装具をコントロールできずに事故に繋がるケースが多いようです。[図4][図5]

受傷状況は、骨折が全体の4割を超え脱臼・捻挫等と合わせると7割を超えます。[図6]

スキーでは5割が下肢の負傷、スケートでは、5割が上肢の負傷と種目により負傷の特徴が見えます。

図7 図8

ここでも指導者の事故が3割を占め、昨年11月号にも事例を紹介しましたが、スカウトの身を守るために無理な体勢になったり、自分自身の不注意で事故が起こるケースもあります。スカウトを監視する場合に自分自身も装具を着ける必要があるか、自分の技量でそれが可能かを考えることも必要ではないでしょうか。

図4 発生時間別件数：スキー（45件）

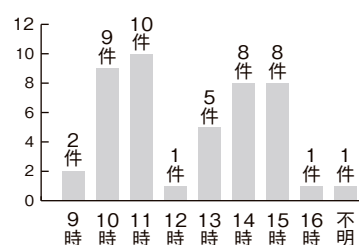


図5 発生時間別件数：スケート（29件）

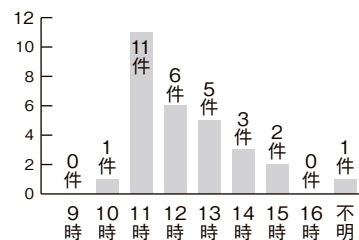


図6 傷病別（74件）

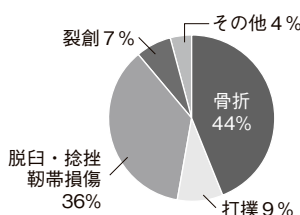


図7 スキー受傷部位（45件）

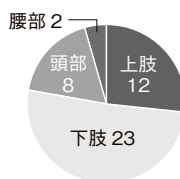
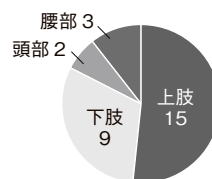


図8 スケート受傷部位（29件）



見えてくる要因と注意点

●基本をマスターしないまま滑らせている。

冬の活動種目の装具は、長さが長く、鋭敏で操作しにくいという特徴があります。制動をいかにかけるかが上達の早道です。インストラクター等を活用し基本を身につけさせましょう。それが安全だけでなく、技能章やチャレンジ章の修得にも繋がります。

■ルールが守られていない

報告の中で、スケートリンクの中で鬼ごっこをして転倒し骨折をした事例があります。このような行為は、他のスケーターにも迷惑ですし危険です。

スキーでは上から滑り降りる人が、下方の人に十分に注意しながらコースを決めるような配慮も必要です。

図あと1回滑ろうと思うな

年に1回のスキー・スケート行事が多いと思います。しかし今年の有終の美を飾ろうと、もう一回滑って事故が起こっています。

以上をふまえて、指導者の皆様は計画の段階からスカウトに対する安全教育を行い、状況に応じた具体的な指示・指導を徹底し、安全確保に努めてください。この冬はスキー等での事故が減少し、楽しい思い出が残る活動にしていきたいものです。

安全委員会

【参考記事】○2006/2007/2008年12月スカウティング誌「冬の安全」チェックシート等活用 ○大阪連盟発行「新野外活動のQ&A」4項「冬のプログラム」